

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平7-324279

(43) 公開日 平成7年(1995)12月12日

(51) Int.Cl.⁶

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

D 0 6 L 1/02

審査請求 未請求 請求項の数 1 書面 (全 2 頁)

(21) 出願番号 特願平6-146939

(22) 出願日 平成6年(1994)5月25日

(71) 出願人 594109093

大村 佳生

大阪府東大阪市中石切町5丁目9番25号

(72) 発明者 水上 雅博

大阪府東大阪市中石切町5丁目9番25号

(54) 【発明の名称】 水溶性汚れを除去できるドライクリーニング方法

(57) 【要約】

【目的】ドライクリーニングにおいて繊維の収縮、つやの消失および風合変化は従来のドライクリーニングと同等の状態の水溶性汚れの洗浄性を画期的に向上させる。

【構成】水酸基数1~3を含有する炭素数6~10のアルコールに水を8~20%および高級アルコール(炭素数12~18)酸化エチレン縮合物(酸化エチレン数40~80)を0.3~1.5%添加してドライクリーニング溶剤として用いる。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 水酸基数1～3を含有する炭素数6～10のアルコールに8～20%の水及び高級アルコール（炭素数12～18）酸化エチレン縮合物（酸化エチレン数40～80）を0.3～1.5%を添加して溶剤とすることを特徴とするドライクリーニング方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明はドライクリーニングにおいての洗浄力の改良に関する。

【0002】

【従来の技術】 従来、ドライクリーニング溶剤として石油、テトラクロルエチレン、トリクロルエタン及びトリクロルトリフルオロエタンを用いて、あるいはそれらの溶剤に微量の水を可溶化してドライクリーニングを行っていた。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】 上記技術においては溶剤が水を微量しか含有できないために水溶性汚れを強力に除去することはできなかった。本発明はこの欠点を改良することを目的とする。

【0004】

【課題を解決するための手段】 水酸基数1～3を含有する炭素数6～10のアルコールに水を8～20%および高級アルコール（炭素数12～18）酸化エチレン縮合物（酸化エチレン数40～80）を0.3～1.5%を添加することにより本発明を完成した。

【0005】

【作用】 上述の如く構成したものをドライクリーニングの溶剤として使用する。

【0006】

【実施例】 以下、本発明の一実施例を詳細に説明するが本発明はこれらに限定されるものではない。ヘキシレングリコールに水15%およびポリオキシエチレンステアリルアルコールエーテル（酸化エチレン数40）1%含有させた溶剤をドライクリーニング溶剤とし

て用いた時の洗浄率と従来のドライクリーニング溶剤にソープを1%チャージしてできる限りの水を可溶化してドライクリーニング溶剤として用いた時の洗浄率を比較した。洗浄率を比較する時の標準汚染布としてEMPA社製の汚染布EMPA116（ミルク、血液、カーボンブラックより構成される汚染布）を用いた。洗浄方法は450mlの容器のなかに各溶剤を200mlずつ及び10cm×10cmの大きさに切断したEMPA116を3枚ずつ入れてラウンダー・オーメーターを用いて5分間洗浄し、一度各溶剤を廃棄し、各溶剤を300mlずつ入れて3分間濯ぎを2回行い、自然乾燥を行ったあとアイロンをあてたのち反射率を測定して洗浄効率を算出した。そのときの結果を表1に示す。

表1

溶剤の種類	洗浄効率%
本発明品	15.2
石油系溶剤	2.1
テトラクロルエチレン	1.6
トリクロルエタン	3.4
トリクロルトリフルオロエタン	1.5

【0007】

【発明の効果】 上述の如く、繊維の収縮、つやの消失および風合変化は従来のドライクリーニングと同等な状態のままドライクリーニングにおける水溶性汚れに対する洗浄効率を画期的に向上させることが可能になる。